HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	平成二十二年度　北海学園大学大学院文学研究科　博士論文［要旨］と［審査結果］
著者	塩谷，昌弘; SIOYA, Masahiro
引用	年報新人文学(7): 386-392
発行日	2010-12-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

■平成二十二年度　北海学園大学大学院文学研究科　博士学位論文

江藤淳の《物語》世界

文学研究科　日本文化専攻　博士課程三年
塩谷　昌弘

［要旨］

本研究は批評家・江藤淳の『〜と私』という形式のタイトルを持つテクストの分析を通して、その物語性、構造、しくみを解明することを目的とし、それとともに、これまで批評、エッセー、自伝といったジャンルとして読まれてきた文学テクストの読みの可能性を探る試みである。

これまで江藤淳の『〜と私』は、批評、エッセー、自伝などの諸ジャンルに分類されてきた。しかし、このテクストは明らかに小説的な特徴を備えており、あたかも「私小説」のように書かれているのである。そのようなある種の物語的な言説としてテクストを捉えなおすと、『〜と私』は、批評家の文学観や思想の表明、あるいは個人的な体験や生い立ちが語られた自伝、といった諸ジャンルを超えて、物語として読み得るものとなる。そして、物語言説として読むことによって、このテクストは新たな可能性を示すのである。

第一章では『アメリカと私』を分析した。このテクストはアメリカから帰国した後に書かれた第一部「アメリカと私」と、アメリカ滞在中に書かれた第二部「アメリカ通信」から構成されている。第一部「アメリカと私」は、帰国後にアメリカ体験を再構成して書かれているためテクストに表象されている「私」（＝江藤淳）はアメリカ体験を通して（ある意味では予定調和的な）成長を果たしているのだが、第二部「アメリカ通信」で表象されているアメリカ滞在中の生々しい「私」は、再構成された第一部の「私」を差異化している。しかし、こうした分裂しているかに見える二つの「私」は、第一部、第二部という既存の配置構成を解体し、テクスト内部で語られている時期に沿って読み直すことによって、むしろ明確なアイロニーとして読むことができた。

第二章においては『文学と私』、『戦後と私』、『場所と私』、『日本と私』という四つのテクストを分析した。これらのテクストは互いに引用関係にあり、また、主題の影響関係も見出される。『文学と私』と『戦後と私』では、

「私」にとっての「戦後」という時代が「喪失の時代」として示されるのであるが、そこで「喪失」したものを取り戻すために『日本と私』においては、「私」が「家」（＝「母」の象徴）を獲得しようとして失敗に終わって、テクスト自体が未完になっている。しかし、『場所と私』では、「喪失」したものが「庭」（＝「父」の象徴）として獲得されるのである。つまり、『場所と私』は『日本と私』の語り直しとなっており、「私」の回復の物語が完成されたテクストとなっていたのである。

第三章において分析した『犬と私』はエッセー集であり、初出掲載誌も個々別々で六年間にわたって書かれた「犬」に関するエッセーを寄せ集めたものであるのだが、これらのエッセーには〈移動〉に関すること、〈水〉に関すること、そして〈異界性〉に関する事柄が特徴的に語られており、これらの要素を物語の構成する「物語素」として捕捉すると、一つの潜在的な物語が姿を見せはじめる。それは「私」が、台風（伊勢湾台風）の日にやってきた異界的な存在である黒い犬（飼い犬のダーキイ）と移動（引越し）を繰り返して、異界の入口がある高台（のマンション）に辿り着き、そして、水の不足していた東京に水が満たされることによって、異界への通路が開かれて、その直後に友人（作家の山川方夫）とともに犬が異界へと帰っていくという物語であった。この経験を通じて「私」は自分が異界的な存在でしかありえないということを認識していくのである。したがって、一見断片的なエッセーの集成であるこの『犬と私』にも潜在的な物語が底流にあったのである。

第四章においては『妻と私』を分析した。このテクストが発表された直後に作者の江藤淳は自殺している。そのため自殺以後、このテクストには様々なパラテクスト性があらわれ、次第に『妻と私』は江藤淳の「遺書」として読まれるようになっていった。しかし、本来の『妻と私』にはそのような性質は見られず、明確な回復の物語が示されているのである。また、この物語にはウラジミール・プロップが民話の構造分析において析出した「機能」概念が各章にことごとく表れるのだが、そのように民話的な物語構造を捕捉した上で、パラテクストとしての「あとがき」において語られていることを考慮してみると、そこには「私」と亡き妻の存在をめぐるパラドックスが示されており、同時にそれはテクストが循環的な物語構造であることを示しているのである。あたかも、亡くなった妻と自殺した「私」が、永遠に生きられるかのような物語となっていた

のである。

以上のように本研究では、江藤淳の『〜と私』を物語として読み、その構造やしくみを解明することで、これまで限定的にしか読まれてこなかった批評という文学ジャンルの新たな読みの可能性を示すことができたと考えられる。

［審査結果］

論文内容の要旨

塩谷昌弘氏の本論文は、批評家江藤淳の『〜と私』をタイトルとする批評・エッセイを対象に、主としてナラトロジーとテクスト分析の諸理論と方法を用いて分析し、従来の批評・エッセイというジャンルに属す随筆の物語性（虚構性）を浮き上がらせ、江藤淳のエッセイの虚構性と、批評というジャンルにおけるあらたな側面を明らかにしようとしたものである。論文は、序章、4章24節と終章（約20万字）から構成されている。

「序章」は、現代日本文学批評史において、江藤淳の『〜と私』というエッセイが、どのようなジャンルを背景にして成り立ったかについて言及し、小林秀雄を嚆矢として始まった「創作的批評」を通して、江藤淳の批評の源流を探り、「私小説」の伝統のなか、『〜と私』という随筆は、虚構性があるとともに、自伝的な諸要素が存在することを確認し、ジャンル研究と自伝研究を踏まえて、既存の批評ジャンルと私小説に対して、江藤淳の『〜と私』というエッセイは、「曖昧さや流動性」を呈していることを指摘する。そういったパースペクティヴを前提に、本論文

は、テクスト分析とナラトロジーの諸理論を応用して、江藤淳の『アメリカと私』、『日本と私』、『戦後と私』、『文学と私』、『場所と私』、『犬と私』、『妻と私』という七編のエッセイ集を分析の範囲としている。

第一章「交錯する物語――『アメリカと私』論」は、江藤淳がアメリカから帰国後に書いた第一部「アメリカと私」と、アメリカ滞在中に書かれた第二部「アメリカ通信」から構成された『アメリカと私』を分析し、その既存の配置構成を解体して再構成することによって、そのテクストに表象された時間と「私」の順序が、事後の再編集によって「一貫性」と「面白さ」をもたらしたことが明らかにされたが、実際、その両テクストには差異が見られ、分析を通じて前後「分裂しているかに見える」「私」には、むしろアイロニーすら介在していることが明らかにされる。

第二章「『家』、『庭』の物語――『戦後と私』、『文学と私』、『日本と私』、『場所と私』論」は四つのエッセイを分析し、それぞれ別々のエッセイでありながら、諸テクストが相互に諸主題を共有して、引用関係にあり、一つの物語として語られていることが見出される。その諸テクストにおける相互の主題の共有と引用関係は、ジェラール・ジュネットの提唱した五つの超テクスト性の理論に担保されるまでもなく、具体的な分析によって戦後の「私」は「喪失の時代」に生き、その「喪失」したものを取り戻すため、「家」、「庭」を獲得することによって、「私」が「回復」するという、バラバラなエッセイでありながら見事に物語として語られたことを呈示する。

第三章「物語としての断片――『犬と物語』論」は、個々別々に六年間にわたって書かれた「犬」に関するエッセイ集を分析したものである。そこで「物語素」として諸エッセイにおいて「移動」、「水」、「異界性」というエッセンシャルな要素が考察され、六年間にわたって発表された諸エッセイは、一つの物語として紡ぎ出されていることが明らかにされる。そこで一見バラバラのエッセイには一貫したストーリーが認知できないように見えるが、しかし、この分析を通じて、一貫した物語が描かれていることが確認されるのみならず、江藤淳の「私」にとってその内面において存在論的な「異界」という世界が存在していることも明らかにされる。

第四章「円環する物語――『妻と私』論」は、民話の構造分析理論をもって『妻と私』を分析し、そのエッセイの諸プロットは民話のような仕組みをなしていることを明ら

かにする。しかもエッセイの始まりと終わりが一種のウロボロスのような循環構造をなしており、そこにエッセイが見事に物語として読まれている理由が露呈される。

終章は、序章を前提にして四章にわたって分析してきた結果をまとめ、各章それぞれ違ったアプローチの仕方によって分析してきたものの、江藤淳のエッセイの物語性を解明するのに、有効性において一貫していることが確認され、各章において、江藤淳のエッセイにはそれぞれアイロニー、間テクスト性、語り直し、潜在的な物語、パラドックス・循環構造といったような物語性と構造が存在していることを力説し、『〜と私』のジャンルの「曖昧さ」と、そのジャンルの越境性を示唆して、今後の課題を述べる。

論文審査結果の要旨

1　審査の経過

審査請求論文に対する審査は、書面審査及び公開口述試験をもって行われた。口述試験は平成二十二年七月二十一日に実施された。口述試験では公開で本論文について著者の説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行なった。その結果、審査委員全員により合格と判定された。その後、平成二十二年八月五日北海学園大学大学院文学研究科委員会において、審議の上、無記名投票した結果、同論文の合格を決定した。

2　評価

本論文は、批評家江藤淳の七編のエッセイ・随筆をナラトロジー・テクスト分析などの諸方法論を用いて分析し、一般的に物語として見なされないジャンルにおけるエッセイ・随筆が、どのように物語として書かれていたかを考察したものである。その分析は、エッセイと物語、批評と物語を交通するところの江藤淳のエッセイの構造的な仕組みを明らかにしたことが評価できる。

具体的に、第1は、その分析を通じて、江藤淳のそれら

のエッセイ・随筆において、作者の私的な、物語創作となる「私小説」へ接近していることが見え隠れしながら、歴然とした随筆であることに変わりはなく、また自伝というジャンルとは一線を引きながら、見事に「自分史」を語りのけるという、既存の批評と自伝という大きな二つのジャンルの間に存在する稀有なケースを浮き彫りにしたことである。

第2は、江藤淳のエッセイについて、今までアプローチしたことのないテクスト分析やナラトロジーなどの方法論によって分析したのであるが、諸理論の相互の整合性を求めるべく施しがあまねく実践されたとはいえないものの、有効な手法によって、妥当な結果をもたらしたのは評価すべきところである。

第3は、現代日本の批評と批評家についての解析、あるいはそれにまつわる日本の読書界・文壇などへの考察の視点において、当論文は独特なアプローチをしたところ、その独創性が評価できる。

第4は、江藤淳の伝記研究において、批評家・作家、あるいはその内面世界の一側面を、そのエッセイの分析を通じて明らかにし、江藤淳の伝記研究にも寄与できたところであろう。

もちろん、本論文の分析において理論と分析対象との関係の整合性や、分析それ自体の周到さにおいて問題がないわけではなく、またタイトルに見られるような趣味本位の読者への迎合などを克服すべき諸問題は残されているものの、批評・エッセイについての研究において、確実な一歩を推進させたものと認められる。

以上の論文審査並びに最終試験の結果にもとづき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格があるものと認める。

3　学内の手続き

以上の博士論文は、北海学園大学大学院委員会での報告、承認に先立ち、本研究科では、次の手続きを踏んだ。

平成二十二年五月十三日に、提出予定論文報告が実施された。

平成二十二年六月十日に、博士学位請求論文が提出された。

平成二十二年六月二十四日に、博士学位論文審査委員会が設置された。

平成二十二年七月二十一日、文学研究科博士（文学）学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、最

終試験を行い、公開で本論文について著者の説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行なった。その結果、審査委員全員により合格と判定された。

平成二十二年七月二十九日～平成二十二年八月四日、本研究科委員会の委員に対し、博士学位請求論文が公表された。

その後、平成二十二年八月五日北海学園大学大学院文学研究科委員会において、審議の結果、無記名投票の上、同論文を合格と決定した。平成二十二年九月十五日、北海学園大学院委員会において、同論文に関する文学研究科委員会の審査経過ならびに論文要旨が報告、承認され、同年九月三十日、博士（文学）の学位が授与された。

論文審査委員

主査　北海学園大学教授　テレングト・アイトル

副査　北海学園大学教授　小野寺静子

副査　北海学園大学教授　安酸　敏眞